

目次

はじめに——「五浦から世界へ」

シンポジウム1日目

1 日目プログラム

主催者開会挨拶

開会挨拶

三村信男

那波多目功一

記念講演1 岡倉天心と文化財

青柳正規

記念講演2 岡倉覚三とボストン美術館——東西の出会い

アン・ニシムラ・モース

講演1

スワームィ・ヴィヴェーカーナンダと
岡倉天心——インドと日本の架け橋

スワームィ・メーダサーナンダ

講演2

文化を演出する——イザベラ・スチュワート・
ガードナーと北東部女性エリートから得た信頼

ヴィクトリア・ウエストン

講演3

六角堂と『茶の本』の「はたらき」

小泉晋弥

講演4

『茶の本』とオペラ台本《白狐》

清水恵美子

95

81

63

45

29

17

15

13

12

11

5

パネルディスカッション 「天心の思想と現代的意義を探る」

113

閉会の辞

影山俊男

出席者略歴(シンポジウム1日目)

127 125

シンポジウム2日目

2日目プログラム

シンポジウム2日目報告

清水恵美子

講師略歴(シンポジウム2日目)

139 131 130

シンポジウム後記

共催・後援・協賛パートナー一覧

143 140

附録1 六角堂 再建の軌跡

附録2 六角堂は茶の本からはじまる

附録3 天心を理解する一〇の遺品——茨城大学五浦美術文化研究所所蔵品紹介

183 169 145

編者代表あとがき／索引

【凡例】

一、本文中および目次に記載のない文章の執筆者は以下の通りである。

はじめに（藤原貞朗）、シンポジウム後記（清水恵美子）、附録1（三輪五十二・茨城大学名誉教授、附録2（小泉晋弥）、附録3（清水恵美子）。

一、翻訳と講演のテープ起こしは、小林英美（茨城大学）、清水恵美子、藤原貞朗が担当した。「」内の記述は訳者の補注である。

一、各講演・附録で参照した図版の所蔵および出典は以下のとおり。

「岡倉天心と文化財」 図1〜4（東京国立博物館）。「岡倉覚三とボストン美術館」 図1〜7（ボストン美術館）。

「スワージー・ヴィヴェーカーナンダと岡倉天心」 図1〜5（日本ヴェーダーンタ協会）。「文化を演出する」 図

1・3・8（イザハラ・ガードナー美術館）； 図2（Green Acre on the Piscataqua）； 図4（Gipson, *The Life of*

Emma Thurstoy）； 図5〜7・9（バハイ古文書館）； 「六角堂と『茶の本』のはたらき」 図1〜9（茨城大学）；

図7（『芥子園画伝』）； 図9（青羽光夫『中国庭園』）。「茶の本」とオペラ台本『白狐』 図1・3（茨城大学）；

図4（Carter, *Isabella Stewart Gardner and Fenway Court*）； 図5（Knight, *Charles Martin Loeffler*）； 図9（Easton,

The Boston Opera Company）。附録1・2（茨城大学・茨城新聞社）； 附録3（茨城大学）。

はじめに——「五浦から世界へ」

都会から遠く離れて

二冊の英文著作『The Ideals of the East (東洋の理想)』(一九〇一年)と『The Book of Tea (茶の本)』(一九〇六年)で知られる「天心」こと岡倉覚三(一八六三—一九一三)。若き二〇代から三〇代にかけては文部省官僚のエリート街道まっしぐら、文化財行政と教育行政に深くコミットして、近代日本の美術文化の枠組を作り上げた。さらに、日本美術院を立ち上げては日本の美術の未来の道筋をつけるとともに、インドを訪問しては『東洋の理想』を書いてアジアの声を欧米に発信、続いて訪れた北米のボストンでは当地の美術館キュレーターとして中国・日本美術部のコレクションを充実させつつ、日本の美術文化の発信者として『茶の本』を上梓した。

明治から大正にかけて、いや、現代ですら、岡倉覚三ほどの成功と国際的名声を得た日本人はそうはいない。人生の成功者である。華々しい人生だっただろう……。そんな印象を彼に対して抱いている人は、その早すぎる晩年の約一〇年を過ごした五浦を訪れると間違いなく戸惑いを覚えずにはいないだろう。

岡倉が晩年を過ごした五浦の地は、茨城県の北端、北茨城市にある。東京駅から行くなら、JR常磐線の特急と普通列車を乗り継ぎ約二時間半北上して大津港駅で下車、さらにそこからタクシーに乗り込んで一〇分ほど（徒歩なら三〜四分）山道を走らせねばならない。そこには現在、「天心旧邸」、「長屋門」、「六角堂（観瀾亭）」などからなる「天心遺跡」があり、晩年の岡倉の心情を偲ぶことができる。これらのモニュメントは昭和三〇年に岡倉天心偉績顕彰会から茨城大学へ移管され、現在まで六〇年あまり茨城大学が五浦美術文化研究所として保存・管理をしている。

東京から遠く離れた、豊かだが厳しくもある自然環境のこの地に岡倉がやってきたのは一九〇三年のこと。その翌年にはボストン美術館の仕事が決まり、ボストンと五浦を往復する生活が始まる。かたや国際的な第一線の美術館員の生活、かたや人里はなれた野生的な自然のなかの生活、このギャップに私たちは驚くほかない。このギャップに満ちたボストンと五浦の往還生活のなかで、『茶の本』を書いていたことになる。岡倉は何を考えて晩年を過ごしていたのだろうか。

五浦なくして『茶の本』なし

岡倉覚三（天心）の研究は、近年、若い研究者も増えて盛んである。日本国内では毎年のように岡倉にまつわる展覧会やシンポジウムが開かれ、さらには、日本のみならず、二〇〇六年には『茶の本』刊行百周年を記念してインドで、二〇一三年には生誕百年を記念してボストンで、大きな国際シンポジウムも開かれた。とはいえ、残念なことに、岡倉の晩年の一〇年、いうなれば彼の「五浦時代」の研究はさほど進んだとはいえない。岡倉にとつての五浦は、よく言ってせいぜい晩年の「隠棲の地」と考えら

れる程度のもので、最悪の場合は、東京を追われて「都落ち」してたどり着いた場所だとネガティブなイメージに支配されるケースもある。

しかし、実際には、五浦時代の岡倉の仕事はきわめて重要であり、晩年の彼の思想にとって、五浦という地はかけがえないものであった。この点については本書所収の五浦美術文化研究所所員である小泉晋弥氏の論考、および同じく所員の清水恵美子氏の近年の仕事（とくに『五浦の日本美術院と岡倉天心』）を参照していただきたい。大胆に言えば、五浦での生活と思索がなければ、晩年の岡倉の思想の深まりも、『茶の本』もなかった。この事実を伝えることが、本書の目的のひとつである。また、あまたある岡倉天心関連図書のなかで、本書の独創性があるとすれば、この主張と視点のもとに構想されているという点である。

本書の構成

本書は、「五浦から世界へ」と副題された「茨城大学国際岡倉天心シンポジウム2016」での登壇者六人の講演とディスカッションを中心に構成されている。講演は岡倉の生涯をバランスよく、かつ最新の資料も紹介しながら、岡倉をこれまで知らなかった人にも彼の生涯の全体像が理解できるように配置されているが、副題が示すように、従来のシンポジウムでは取り上げられることのなかった晩年の五浦の岡倉の理解が深まるよう構成されている。とくにディスカッションでは、発表者それぞれが五浦の意義を検討しており、新しい岡倉理解の一面を提示することができたと自負している。

このシンポジウムは、岡倉の思想と五浦の重要性を再検討し、国内外に発信する目的で、茨城大学の

主催のもと、平成二八年九月三日に茨城県水戸市で開催された。シンポジウムのために茨城県内外の多数の機関および企業からご寄付を頂戴するとともに、当日は三六〇名の参加者を得た。岡倉の思想への関心の高さ、そして、五浦の復興への期待の高さをあらためて認識する機会となった。また、翌日の九月四日には、五浦の「天心遺跡」を訪問するツアー「北茨城市 五浦探訪」を行い、晩年の岡倉の足跡を登壇者と参加者とともに辿った。

シンポジウムとツアーの目的はもうひとつあった。海原に直面する六角堂は、六年前の東日本大震災の際に津波に見舞われて海中へと流出し、消失した。天心旧邸と長屋門も半壊した。その後、文部科学省からの基金とそれを上回る多くの民間からの寄付を得て復興を果たすことができた。その復興を記念するという大きな目的もあった。私たちの思いを代表して、シンポジウムでの関係者の挨拶を本書には収録している。

本書の後半には、消失した六角堂の復元プロジェクトの記録も収録した。茨城大学は二〇一四年にすでに『六角堂 再建の軌跡』と題する小冊子を刊行しているが、非売品で関係者のみに配布するにとどまっており、学術的な復元の過程を伝える貴重な内容をより多くの人々に知っていただきたく、本書に収めることとした（附録¹）。復元過程を知ることにより、晩年の五浦の岡倉の思想をより深く理解できるのではないかと思う。あわせて後半では、「天心を理解する一〇の遺品」と題し、茨城大学五浦美術文化研究所が所蔵する美術資料を抜粋して紹介している（附録²）。資料を通じて、晩年の五浦の岡倉の生活をよりリアルに実感することができるであろう。

本書を手にした読者の方々には、ぜひ、本書を片手に常磐線に乗り込み、茨城県北茨城市の五浦を訪れ、「天心遺跡」を散策していただきたい。岡倉の生涯と思想を偲びながら、六角堂から太平洋を一望していただきたい。岡倉覚三をよく知る人、さらには専門の研究者であっても、五浦の地を実際に訪れたことのある人は案外少ないのではないだろうか。実のところ、本書を読まずとも（？）、五浦に足を運びさえすれば、直ちにこの地の重要性を理解できるだろう。荒波に面する崖下に設けられた六角堂からは、潮風を受けながら太平洋が一望できる。その先にはアメリカ大陸があり、ポストンがある。海を介して、世界へとつながっている。それを実感することができることだろう。

シンポジウム 1日目



2016年9月3日（土）プログラム

会場 ホテルレイクビュー水戸

- 13:00 主催者挨拶 三村信男（茨城大学学長）
オープニングゲスト 那波多目功一（日本美術院理事）
-
- 13:15 記念講演 1 「岡倉天心と文化財」
青柳正規（前文化庁長官）
- 13:45 記念講演 2 「岡倉覚三とボストン美術館——東と西の出会い」
アン・ニシムラ・モース（ボストン美術館日本美術課長）
- 14:15-25 休憩
-
- 14:25 講演 1 「スワミー・ヴィヴェーカーナンダと岡倉天心——インドと日本の架け橋」
スワミー・メーダサーナンダ（日本ヴェーダーンタ協会会長）
- 講演 2 「文化を演出する——イザベラ・スチュワート・ガードナーと北東部女性エリートから得た信頼」
ヴィクトリア・ウェストン（マサチューセッツ州立大学准教授）
- 15:15-25 休憩
- 15:25 講演 3 「六角堂と『茶の本』の「はたらき」」
小泉晋弥（茨城大学教授）
- 15:50 講演 4 「『茶の本』とオペラ台本《白狐》」
清水恵美子（茨城大学准教授）
- 16:15-30 休憩
-
- 16:30 パネルディスカッション
「天心の思想と現代的意義を探る」
コーディネーター：藤原貞朗（茨城大学教授／五浦美術文化研究所所長）
- 17:30 閉会挨拶 影山俊男（茨城大学理事／社会連携センター長）
-

シンポジウム総合プロデューサー：影山俊男
シンポジウム企画・監修：清水恵美子

主催者開会挨拶

三村信男（国立大学法人茨城大学学長）

国際岡倉天心シンポジウムの開会に当たり、主催者・共催者を代表してご挨拶申し上げます。まず、本日はかくも多くの皆様にご参加頂き、大変有り難うございます。また、多数のご来賓、講師の皆様にもお越し頂きました。著名な日本画家で、茨城県出身である日本美術院・那波多目功一理事、前文化庁長官の青柳正規先生、それから、アメリカからご出席頂いたポストン美術館のアン・ニシムラ・モース日本美術課長をはじめ、多くの国内外の講師の方にご出席頂いております。これらの皆様にも、心からお礼を申し上げます。

さて、本日のシンポジウムですが、茨城大学と岡倉天心先生との間には、深い関係があります。本学と天心先生との関係のはじまりは、六〇年前に遡ります。昭和三〇年に、岡倉天心偉績顕彰会の当時の会長、横山大観先生から、五浦にある天心先生ゆかりの六角堂、天心邸、長屋門と庭園が寄贈されました。それ以来、「五浦文化研究所」を設置して、この施設の保存、公開と天心先生の業績と思想の研究を行ってきました。この施設は、毎年、一〇万人近くの参観者がある全国の大学の中でも有数の場所となっております。

また、忘れられないのは、平成二三年三月に東日本大震災と大津波が来襲して、六角堂が流失したこ

とです。これに対して、当時の学長を始めとして、茨城大学では全学の力で再建するという方針を決めて、地域や全国の皆様の物心両面にわたる大変大きなご支援によって、明治に建てられた当時の姿に復元したわけです。

さて、天心先生は、よくご存じの通り、明治期の日本の美術、文化運動に、燦然と輝く足跡を残された知の巨人であります。東京美術学校、現在の東京藝術大学ですが、その開校、日本美術院の創立、文化財保護事業など多くの業績を残しておられます。同時に、明治のさなかに、いち早く日本と東洋の文化の独自性と価値を発見し、世界に発信されました。

現在、本県でも、人口減少が心配され、いかに地域の活力を維持するかが大きな課題になっています。そうした時に、私達の地域に、世界と交流して日本の文化の深い意義を世界に発信した天心先生の思想を学ぶことは大変意義があると考えました。このシンポジウムでは、代表作である『茶の本』で示された天心先生の思想はどのようなもので、現在の私達は何を学ぶべきか、といったことについて、皆様と共に考えたいと思います。このシンポジウムを契機にして、私達が茨城の文化の伝統、文化の力を改めて認識し、新しい文化の創造に進むことができれば、この地域の将来を輝かせる力になると考えます。そのためにも、茨城大学では、今後、岡倉天心研究や地域文化の研究者のネットワークを広げたいと考えております。

今日は、天心先生につながる各界の講師の皆様からお話しを伺うことになっています。皆様とともに有意義なシンポジウムを持ち、充実した時間を過ごしたいという期待を込めて、ご挨拶に致します。

開会挨拶

那波多目功一（日本美術院理事）

日本美術院は皆様よく御存知の様に岡倉天心先生が創設されました日本で最初の日本画の美術団体です。教師なし先輩あり、教習なし研究ありの綱領を基に今日まで歩んでまいりました。

日本には三つの大きな日本画の団体がございます。院展、日展、そして創画展とありますが現在最も多くのファンをもち美術愛好家の方々に愛されているのが院展ではないかと思っております。天心先生が日本画の本質として最も重要視されていたのが絵画の中における四次元の世界の空気感だと思います。いろいろ時代を経て絵画そのものも変化してまいりましたが日本美術院はその空気感を大切な指針として守ってまいりましたし、これからも守ってまいります。

その天心先生を尊敬されておりました日本美術院理事長で文化勲章受章者の松尾敏男先生が（二〇一六年）八月四日永眠されました。松尾先生は一九九一年、平成三年に院展出品作《五浦潮音》を発表されました。天心先生が六角堂の中でじっと太平洋を見つめ思索にふけっているお姿を描かれました。松尾先生はのちに同じ目線で海を見つめ将来に向かって日本画の立ち位置を共有してみたかったと話されました。天心先生の愛弟子の大観先生、その弟子の堅山南風先生、そしてその弟子の松尾敏男先生と直系の画家が亡くなられたことは非常に残念ですし寂しい限りです。天心先生の教えを受け継がれこれま

でに幾多の素晴らしい先輩たちが育まれて参りました。日本画に対する天心先生の考え方は今なお日本美術院の私たちに燦然と輝いておりますし脈々と生きております。

美術史家であり思想家であり教育者であった巨人、岡倉天心先生のいろいろなお話が伺えますこと、本当に楽しみにしております。ご招待いただきましたこと、誠にありがとうございます。

記念講演 1

岡倉天心と文化財

青柳正規
(前文化庁長官)



天心のいた時代

実は私は岡倉天心に関してはまったくの素人です。「岡倉天心と文化財」というテーマをいただいで、私なりに七〇を超えての手習いで一生懸命に勉強しましたので、これからお話しするのはその小さな果実にすぎません。その前に、ここに茶花が飾られています。あとで岡倉天心の『茶の本』がお話に出ると思いますが、花瓶のこの辺りに吾亦紅がごさいます。この名前には自分も赤くならないという説もあれば、家紋の木瓜の形をしているからとも言われます。それからこの黄色いのは女郎花ですね。最近非常に減っています。絶滅危惧種にしてもいいくらいです。それから鶏頭とか、竜胆もありますね。きれいに飾ってあって大変気持ちの良い演壇です。だから気持ちよくお話できます。

さきほど三村学長が「岡倉天心とは一体何者か」と話されましたが、私が少し勉強して感じたことは、岡倉はとんでもない秀才だということです。日本稀代の、なかなかこれだけの秀才はいないと思います。たとえば、彼が英語でスピーチした中に「陰影がレンブラントを作り、波が光琳を作った」という言葉があります。非常に短い文章の中にレンブラントや光琳の本質を言い表しています。よく英語で簡潔明快な人のことを「クリस्प」(crisp)といいます。非常に「クリस्प」な言葉を使える人だったので。



当日の茶花写真

彼は七歳になる頃には、家の近所にある英語塾に通って英語を勉強して、そして東京大学に入りました。東京大学は明治一〇年にできるのですが、明治二〇年頃まで卒業論文は全部英語かフランス語かドイツ語で書かなければいけませんでした。ですから西洋学校と言われていました。しかも、日本に唯一の大学だったので単に「The University」という名前で呼ばれており、明治三〇年になって京都大学が出来て、初めて of Tokyo がつくのです。それ以前は「The University」と言っていたので、定冠詞を残したまま「The University of Tokyo」という、ちょっと不思議な表現が今でも残っている大学です。そういうところで彼は勉強しているのです。だから当時の人たちは我々よりもはるかに語学力があつたと思います。そのなかでも岡倉は特に秀でていました。

彼が生まれたのは一八六三年、ペリーが日本にやってきたのは一八五三年です。それから、大体九年、一〇年くらい経っている時です。ペリーがやってきた時、アメリカの人口は約三千万人でした。そして日本の人口は三千二百万人でした。当時は日本の方がアメリカよりも人口が多かったのです。しかし一八七〇年頃になるとアメリカは四千万人になります。移民によってどんどん人口が増え、それがアメリカの国力の源泉になっていきました。ちょうど岡倉が生まれた頃はまだ南北戦争のさなかです。ちなみに、あのリンカーンの有名なゲティスバーグの演説「人民の人民による人民のための政治」はたった二分間の非常に

短い演説でした。リンカーンが、後にアメリカにとって一番有名になる演説をいつしゃべったのか、ほとんどの人がわからなかったくらい短い時間でした。幸いに近くにいた新聞記者が克明にノートを取っていたので、正確な演説の内容が今に伝わりました。そういうときに岡倉が生まれます。

一八六八年に明治になった時、日本が早く文明開化をしなくてはいけないということになり、神仏判然令、つまり仏教と神道を明確に分けようという政策をとります。日本はご存じの通り、お寺の中に神社があったりして、神仏が混交している神社仏閣が多かったわけですが、このときから神仏がはっきり分けられます。これが行きすぎたために、いわゆる廃仏毀釈が行われるようになってしまいました。興福寺の五重塔などは一番上にある双輪のところだけに値段をつけて、後は燃そうということがまことしやかに言われるような時代でした。

日本の文化財を守る

そういう時代に岡倉天心は、アメリカから来ていた宣教師のところで英語を習ったりしていくわけです。その頃、日本は、行きすぎた廃仏毀釈の結果、ほとんど仏像や絵画が流出していくので、それをどうにかしないといけないということになって、ようやく一八七一年（明治四年）に古器旧物保存方という文化財保護の最初の法律が制定されます。

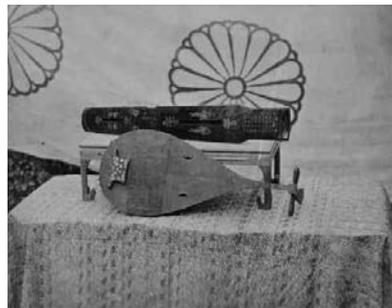


図1 壬申検査における記録写真
正倉院宝物 横山松三郎撮影

これを受けて翌年に壬申検査じんしんという、お寺に残っている古物、宝物がどこに
 どのようなふうにあるのかという調査が行われました。明治五年、一八七二年の
 ことです。この調査の中心になったのは後に博物館館長となる町田久成ひながわや蜷川
 式胤のりたねといった人ですが、彼らが日本を三ヶ月、四ヶ月かけて調べあげていくわ
 けです。調査団には横山松三郎という写真家も同行していたので、このような
 正倉院の御物(図1)や東大寺の大仏殿(図2)の写真がきちっと残されており
 ます。これらは東京国立博物館に所蔵されています。

こういう壬申の調査後に、もっと全国的に地方の宝物を調べなければならな
 いという気運が高まっています。その頃、文部省には、今という文部科学省
 次官のような役職にあった九鬼隆一という役人がおり、職員として入ってきた
 岡倉天心と一緒に日本中の宝物を調べようします。宮内省に設置されるまでで
 すが、さまざまな文化財の調査が本格的に始まりました。この九鬼隆一が京都
 で講演したとき、文化財は大切だと発言していますが、建築のことをほとんど
 話していません。それで伊東忠太という東京大学で建築を教えていた人が、古
 建築も大切だと文句を言って、ようやく建築も調査の一環に取り入れられてい
 くようになります。

岡倉は大学を卒業してから文部省の音楽取調掛に入りますが、のちに古物、文
 化財を中心に扱う役職に変わります。そしてアメリカから来たフェノロサと一



図2 壬申検査における記録写真
 東大寺仏殿 横山松三郎撮影

漆器を手に入れてゆく予定だ。フェノロサ氏は自身の素晴らしい絵画コレクションの強化を図ることだろう。そうすれば、その結果として、ボストン周辺に世界で最も優れた日本美術コレクションが形成されることとなるだろう⁽⁵⁾。

美術品購入のための調査には岡倉覚三も同行した(図4)。岡倉は東京帝国大学でフェノロサの授業をかつて受講していた。モースのコレクションについては『日本その日その日』やその他の著作にも書かれており、蟻川式胤などの古物研究家の助言に多く負っていたことが分かっている。一方、フェノロサが千点以上の絵画をいかにして収集したのか、ビゲローが四千点以上の絵画と五万点以上の浮世絵版画と五百点の武具や装飾品をどのように入手したのかについては詳らかにはなっていない。彼らのコレクション形成に岡倉がどれほど関与したのかについても不明である。ボストン美術館による近年の再目録化プロジェクトで明らかになったのは、彼ら三人のコレクションは体系的に形成されており、今日の日本美術史においても重要なものだと認められているということである。

世紀末のボストン

岡倉覚三がボストン美術館に赴任したとき、モースとフェノロサとビゲローのコレクションが全て受託され保管されていた。コプリー・スクエアにあった

註5 Edward Sylvester Morse, *Japan Day by Day: 1877, 1878-9, 1882-83*. Vol. II (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1917), 239.



図4 (右から) ビゲロー、フェノロサ、岡倉、モース

初代の美術館でも、一八九〇年にフェノロサが日本美術部の学芸員となった際に展示室が拡張され、すでに市民向けの日本の工芸品展が開催されていた。フェノロサはポストン市民に向けて、日本の絵画史についてのレクチャーをするという野心的な計画も立てていたようである。しかし、「岡倉がポストン美術館に赴任した一九〇四年には、美術館の日本美術展示はこうした方向性を見失っていたと考えられる。というのは一八九六年にフェノロサは助手の女性と駆け落ちをし、全てをやり残したまま美術館を去ったからである。新たに日本美術部を任された学芸員たちは真面目ではあったが、日本美術の教育を受けてはいなかった。そして再び、日本の歴史や文化に沿った美術品ではなく、ジャポニザン好みの工芸品が新収蔵品に選ばれ、特別展に展示される状況へと戻っていた。学術的な日本研究を行い、日本文化を正しく理解する学芸員を失った美術館は、技巧とデザインしか見ることができない状態に逆戻りしてしまったのだ。こうして、フェノロサとビゲローの絵画コレクションよりも、派手な欄間らんまや錫製工芸品が優遇されたのだ。

実際、世紀末のポストンでは、ジャポニザン好みの美術工芸品が収集の中心となっていた。イザベラ・スチュワート・ガードナーですら岡倉と出会うまでは、フェンウェイ・コートの個人美術館の壁を華麗な屏風の数々で飾り立てていた。地元の美術商や一八八三年の日本旅行で訪れた古物商から購入した外国

人好みの品々で、たとえば、狩野常信の手になる《源氏物語図屏風》が、欄間装飾と清朝の織物と並んで壁に掛けられていた。純粹に装飾的な観点から飾られたこれらの美術品は、あたかも、ガードナーが所有する西洋絵画を引き立てるために「オリエンタルな」背景を提供しているかのように見える。

展示方法の革新

〔一九〇四年に〕ボストン美術館を訪れた岡倉覚三は、日本美術の展示状況を視察し、全く容認することができない状態であると判断した。そして彼は館長にこう進言する。

「ボストン」美術館は日本美術を一種の流行や冗談であるかのように取り扱っており、真剣ではない……。東洋の作品を扱う担当者は正しい視点を持つべき、すなわち、東洋の視点であるべきだろう。東洋の視点とは、東洋の哲学、生き方、理想に精通し、共感することに他なりません。⁽⁶⁾

さらに岡倉は、この発言の目的が、ボストン美術館のコレクションを「西洋における東洋美術コレクションの代表」の地位に再び復帰させるためであると付け加えている。

岡倉が美術館の顧問となるちょうどその頃、ボストン美術館の理事会は（美術館の現在地である）ハンティントン大通りに、新たな美術館を建設する計画に

註6 一九〇四年一月二七日
「岡倉氏とエドワード・ロビンソン
(Edward Robinson)との会話」
Archives, Museum of Fine Arts,
Boston.

着手し始めていた。そして、これを機に、美術館の考え方——美術館の目的と展示——を大胆に刷新する予定であった。初代のコプリー・スクエアの美術館はサウス・ケンジントン美術館（現在のヴェイクトリア&アルバート美術館）をモデルに、できるだけ多様な美術品と工芸的技巧を示してみせることを優先していた。デザインの基本を公衆に伝え、教育することを主眼に置いていたのであった。これは、東京帝室博物館も含め、当時においては世界のほとんどの美術館に認められる傾向である。しかし、新たなボストン美術館は、当時のヨーロッパの美術館の視察を踏まえ、美術史上の「傑作」を中心に選抜し、その周辺の美学的環境を整えて見せるという政策を打ち出した。この新しい試みはすぐさまアメリカ合衆国のみならずヨーロッパにも影響を与え、コレクション展示の方法を変えていった。建築家が明言したように、新たな展示室は「非常に美しく、見事に整備され、日本美術とは何かを完璧に説明」しており、「訪問者は、かつての美術館では経験しえなかった日本美術の美しさを知る」こととなった。そして、西洋における日本と日本美術の展示方法に大きなインパクトを与えたのだった。

日本美術史の可視化

ボストンに赴任する以前に、岡倉覚三はフェノロサとともに日本美術史の編

註 7 R. Clipston Stugis, Report on Plans Presented to the Building Committee (Boston: Museum of Fine Arts, 1905), 20-21.

纂の最前線で活躍していた。彼は一八九〇年には早くも東京美術学校で「日本美術史」を講じている。

この試みが偉業であるのは、まず、日本美術史の発展に決定的となった作品を選抜し列挙したこと、言い換えるなら日本美術史の基準を定めたことにあるが、さらに美術史を語る時代区分を創案したことも極めて重要である。岡倉は、ヘーゲルの弁証法に従って各時代を画然と規定し、各時代に統治した支配者や政権の本拠地の名を付与したのだった。

キュレイターとなった岡倉がボストン美術館と西洋に向けて提示したのは、こうした堅固な構造をもつ日本の美術史であった。しかし、岡倉はこの美術史を可視的に示すために、まずボストンでフェノロサが放棄した仕事、すなわちコレクションの目録化を行わねばならなかった。岡倉は最初の一〇ヶ月間で、フェノロサとビグローのコレクションの作品鑑定と主題内容の解説、制作年の特定を行っている。そして、重要作品と鑑定した二百点の絵画のリストを作成した。そのリストにはすでに八世紀の《法華堂根本曼荼羅図》、平安時代の《馬頭観音図》(図5)、そして一三世紀の《平治物語絵巻》が含まれており、当時の欧米でこれほど見事な日本美術のコレクションは他になかった。実際、これらの傑作に、ボストン美術館のために岡倉が日本で購入した八世紀末の《菩薩立像》や一二世紀の《大威徳明王像》(図6)などの彫像を付け加えれば、美



図5 馬頭観音菩薩像



図6 大威徳明王像

術館の展示室内だけで（そして市民の教育普及のための美術館カタログのなかだけで）数々の「傑作」が物語る日本美術の歴史を書くことができたのである。

新しい美術館

ハンティントン通りに面した新しい美術館は一九〇九年一月九日に開館した。建築家の最初の建設計画では、日本展示室はサウス・ケンジントン美術館にみられるような旧来の展示プランをほんの少し修正しただけで、従来と変わらず彫刻や貴金属品、掛物、屏風、漆器、磁器、浮世絵版画が並べられる予定であった。しかし、その後の計画において、美術館は「傑作」主義の理念を推進してゆく。この変化には、岡倉覚三が深く関わっていた。『東洋の理想』において岡倉はこう書いている。「各時代の傑作が語りかける静かな雄弁は、真実味のない類型的作品以上に、うまく歴史を物語ってくれるに違いない⁽⁸⁾」。こうして、「東洋美術史初心者の一助となる」だけで「粗雑で不十分」だと岡倉が記した美術品に代わって、傑作の数々が展示室にしつらえられることとなったのである。

日本美術展示室の整備は段階的に行われている。一九〇九年の開館時、メインフロアの展示室はテンブル・ルームに隣接し、仏教美術を展示していた。その他の展示室には、一五〜一六世紀の水墨画が漆工芸と甲冑とともに展示され

註 8 Okakura Kakuzō, *Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan* (London: John Murray, 1903).

たり、桃山から江戸にかけての絵画と浮世絵版画などが展示されたりしていた(図7)。しかし、すぐに、日本美術の充実したコレクションを十分に見せるには、さらなる展示スペースが必要だと認識され、続く五年間に展示方法が修正され、日本美術により広い展示面積が与えられることになる。

展示は時代別に区切られ、メインフロアの展示室に一七世紀以前の芸術が、それ以降の芸術は上階の展示室に展示された。そして全体として「極東美術の流派と歴史の相互関係と発展」が明示されている。展示計画の概略は岡倉が決定したが、実際の細かな展示作業は、岡倉の中国調査や日本帰国のために不在の時期に行われている。このとき展示計画の責任を負ったのは、中国・日本美術部の副部長であったフランシス・ガードナー・カーティス(イザベラ・ガードナーの従兄弟にあたる)である。彼はこう主張していた。「一国の美術はその文明と理想を映し出している。それゆえ、性質の異なる不適切なものに囲まれたならば、その大半の意味を失ってしまうだろう」⁽⁹⁾。こうして、日本美術の展示室は無垢材と漆喰で構成され、障子を通して自然光が入ってくる空間となった。

日本美術は世界美術へ

ボストン美術館での新しい展示室は、西洋における日本美術理解に大きなインパクトをもたらした。岡倉の努力が実り、「エキゾティック」な楽しみとデザ



図7 一九〇七年頃の展示

註9 アーサー・フェアバンクへの岡倉覚三の手紙。一九一一年五月二二日。以下の文献に所収。
Collected English Writings, 第3巻(東京:平凡社、一九八四年)一三三ページ。

註10 Francis Gardner Curtis, "Department of Chinese and Japanese Art," *Museum of Fine Arts Bulletin* (December, 1909), 56.

インを称揚するだけだったジャポニザンの理解が克服されたのである。独特の個性をもった作品は、日本の伝統を背負った「傑作」であると理解されるようになり、その歴史的かつ美学的な意義を通じて、日本そのものの理解もまた育まれていったのである。

何よりも重要な点は、日本の展示室に、美術館の重要な場所が与えられたことだろう。ハンティントン大通りに面して西翼部に日本美術の展示室が設置されたのであるが、一方の東翼部には古代エジプト美術と古典美術の展示室があった。つまり、あらゆるものを展示する美術館において、日本美術が西洋の伝統的な美術と並置されたのである。これは、日本美術がマイナーな存在でなく、世界的な重要性をもつこと、すなわち西洋の偉大な伝統芸術と同等の価値をもつことを宣言することにほかなかった。ボストン美術館を訪問すれば、西翼部で八世紀末の仏陀立像を鑑賞し、東翼部では紀元前四世紀のギリシャのアフロディーテの頭部を鑑賞することができたのである。一九世紀末には東京と京都、奈良に帝国博物館が創設されているが、そこにはまだ西洋美術の傑作が一点もなかった。それゆえ、当時の日本では世界美術のひとつとして日本美術を宣言してみることができなかつたと言えよう。ボストンにおいて、日本美術は世界美術となったのである。

今日、グローバリズムが進む世界への不安が増しているが、話題の著作『コ

スモポリタン主義 外国人世界の倫理』において、プリンストン大学のクワメ・アンソニー・アッピアは、人々はみな違うと認識すること、そして「他人との相違点から学ぶべきことがたくさんある」と認識することこそが重要だと指摘している。さらに彼はこう述べる。「我々は他人に対して義務を負っている。親類知己のつながり、あるいはフォーマルな市民のつながりを越えて果たすべき義務である」¹¹。アッピアによれば、重要なのは「我々の人間的生活の価値だけではなく、個々の人間の生活の価値を真剣に理解すること」であり、「それを価値づける信念と行動に関心をもつこと」¹²である。ルーツから離れた共同体で展示される異なる文化の芸術は、彼の言う「交差する文化理解というコスモポリタンの企図への貢献」¹³となることだろう。

百年以上も前に、岡倉覚三はすでに「交差する文化理解」に深く関わっていた。一九〇五年に開催されたボストン美術館理事会の報告において、岡倉は「芸術の精神は普遍的であるが、その表現形式は、民族の理想や人生哲学が多様であるのと同じように異なっている」と書いている。さらに彼は、それまで自分日本美術の保存に人生を捧げてきたが、これからは「東と西が互によく知り合うべきだ」と考えるようになったと言う。そして、ボストン美術館の「素晴らしいコレクションはこの目的に寄与し、逆に日本に対しても好ましい影響を及ぼすことだろう」と述べたのだった。岡倉はボストン美術館が東西交流の

註 Kwame Anthony Appiah, *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers* (New York and London: W.W. Norton & Company, 2006), xv.

註¹² *Ibid.*

註¹³ *Ibid.*, 132.

場として意味があると信じていたのである——そして我々もまたこの理想をボ
ストンで追求し続けているのである。

六角堂復興の基本方針

1. 六角堂は、明治38(1905)年の創建当初の姿の復元を目指す。
 2. 瓦は、改修工事で葺き替えられていたが、明治38年当時の棧瓦(8寸幅)で復元する。
 3. 宝珠は、海底調査で収集した破片をもとに実寸模型を作製して完成させる。
 4. 昭和38年の改修で変更された南側の出窓は、記録等を検討して当初のものに戻す。
 5. 改修で撤去された中央の六角形の炉を再現し、床仕上げは畳ではなく「板張り」とする。
 6. 土台は、内部は鉄筋コンクリートとし、外側に当時とよく似た石で石張りをして当初の外観を復元する。本体との間に免震用ゴムをかませる。
 7. 窓ガラスは、当時の製法により作成したガラスを用いる。
 8. 建物全体の彩色は、明治38年当時の天然ベンガラ彩色を実施する。
 9. 創建当初にあった雪見灯籠を岩礁に復元する。
-

どの創建当時の資料の提供を呼びかけました。多くの方の協力により写真類も多数集まり、それらをもとに建築士会の方々とさまざまな角度から創建当時の六角堂の検証を行いました。五回にわたる合同会議の末、一〇月ごろに若柳建築事務所により創建当時の図面を

完成することができました。昭和三八年の改修で変更された南側の出窓を当初の姿に戻し、改修で撤去された中央の六角形の炉を再現させました。地震に備えて土台には免震用ゴムをかませることとしました。



明治40年代の六角堂。白黒写真をカラー化しました。

海底調査



六角堂は天心邸・長屋門と共に平成一五年（二〇〇三）七月一日に登録有形文化財に登録されています。文化財として再建するには流出した実物をできるだけ回収してそれを用いて復元する必要があります。幸い六角堂が海に沈んでいくところが目撃され写真に撮られていますので、その付近を中心に海底調査を行うことにしました。調査は海水のきれいな干潮の時期に行う必要があります。まず、六月六日に第一回目の調査が行われました。この日は海底の様子を見るために沿岸近くを中心に監視員一名とダイバー三名で行いました。開始直後から瓦類が次々と見つかり、合計瓦類三四枚、鬼瓦一個が

編者代表あとがき

「五浦から世界へ」と題された本書を閉じるにあたり、私の個人的な「岡倉体験」を書き記させていたきたい。

今から二〇年前の一九九八年、私はフランスに留学し、『かたちの生命』で知られるフランスの美術史家アンリ・フォシヨンの調査をしていた。一年ほど図書館通いをしていると、大学の指導教官が「フォシヨンの遺族に会いに行こう」と誘ってくれた。彼はブライベートで遺族と知り合いだった。そして、パリ14区に住むフォシヨンの娘、当時八七歳のエレヌ・バルトルシャイティスと会った。彼女は『幻想の中世』で知られるユルギス・バルトルシャイティスの奥方で、邸宅には亡き夫の仕事部屋がそのまま残されていた。それから月に一〜二度、約一年間、エレヌのアパルトマンを訪ねて調査をした。すると一人で退屈な彼女は一冊の本を戸棚から取り出した。「お茶の時間だ」といって私を居間へ呼んだ。ある日のお茶の時間、彼女は一冊の本を戸棚から取り出した。一九二七年出版のフランス語版『茶の本』だった。父アンリがプレゼントしてくれたのだという。象徴主義者のガブリエル・ムーレの訳で、当時留学中の長谷川路可による墨絵風リトグラフ挿絵が入っていた。恥ずかしながら、このときまで私は『茶の本』をまともに読んでいなかった。そ

の日の帰り道、もしかしたらと思つて書店に立ち寄ると、仏語版『茶の本』が改訂を重ねて現行版で出ており、すぐさま購入して読んだしだいである。

岡倉は一九一三年に亡くなつており、仏語版で岡倉を知つたフォシヨンは彼と会うことはできなかつた。しかし、もう一〇年岡倉が生きていたなら間違ひなくフォシヨンと出会い、友人となつていたはずだ。『東洋の理想』は一九一六年に仏語版が出て、第一次大戦中にフランスと同盟国となつた日本の文化政治的な思想を伝える著作として読まれた。フォシヨンも『東洋の理想』に大きな影響を受けた。大戦後の一九二一年にパリで開かれた国際美術史会議では、日本美術に關する発表を行い、日本人をさしおいて岡倉の思想の重要性を強調した。さらに大戦間には国際連盟の国際知識人會議の一員となり、タゴールと同じテーブルを囲んだ。岡倉が生きていれば必ずや同じテーブルについていたことだろう。

……というようなことを、私は、仏語版『茶の本』を読んだ後に調査をして知つた。私の研究テーマは「フォシヨンと日本」に定まり、その後、同主題のエッセイや「フォシヨンの思想における岡倉覚三の影響」という論文をフランスで発表することができた。仏語版『茶の本』との出会いがなければこれらの成果はなかつた。そして、帰国した私は茨城大学に就職し、五浦美術文化研究所の所員となつた。「フォシヨンと岡倉が私をここに導いたのに違ひない」と私はひそかに思っている。「五浦から世界へ」と一九〇六年に発信された英文『茶の本』が一九二七年にフランス語に訳され、さらに七〇年の時を経て、私を「フランスから五浦へ」と導いたのである。

五浦はたしかに日本の中心的都市からみれば遠い田舎にあるかもしれない。しかし、不思議と

世界に開かれているということを実感させる特別な場所だ。そんな特別な五浦という記憶のトパスを私たちはいかに受け継ぎ、未来へと受け渡してゆくのか。二〇一六年九月の「国際岡倉天心シンポジウム二〇一六 五浦から世界へ」は、この課題に向けた模索の結果であった。「はじめに」にもあるように、九月三日にホテルレイクビュー水戸で開催されたシンポジウムには、茨城県内外の諸機関、私企業の方々から多大な支援を頂戴し、さらに当日は三六〇名を超える大勢の来場者を得ることができた。「天心」に対する人々の関心が驚くほど高いことを実感した。言うまでもなく、三六〇名という大勢のなかには、長年にわたって岡倉の思想の継承に貢献してきた日本美術院の方々や各地の天心顕彰会の方々、あるいは岡倉の研究者だけではなく、県市町村公共機関の方々、一般企業の経営者やビジネスマン、あるいはお仕事を引退された方々、主婦、主夫、学生など、多種多様な人々が含まれていた。この多様さはそのまま岡倉の思想の普遍性を反映したものだといわねばなるまい。政治や宗教や学問といった特定の領野に制限されることなく、広く美術文化を通じて、多様な人々を結び付けることができるのが岡倉なのである。

私たちは、今こそ、これら多様な人々を結びつける岡倉という人物について学び、そして美術文化についてともに考え、いい意味で利用すべきだろう。そのような思いから、シンポジウムをひとつの契機として、茨城大学五浦美術文化研究所では、二〇一七年から定期的に年二回のペーシード「岡倉天心セミナー」を開催することにした。第一回目は七月二十九日にすでに開催したが、こちらでも予想外の反響を得て一般から九六名もの参加者があった。昨年のシンポジウムからのリピーターも多かった。毎年秋に岡倉の意志を受け継いで五浦で開催してきた「観月会」（茶会、展

覧会、講演会など）に、この年二回のセミナーを加えて、岡倉の「美術文化交流術」を実践してゆきたいと思う。

さいごに、シンポジウム、および本書の刊行に関わったすべての方々に感謝の意を表したい。共催してくださった茨城新聞社と北茨城市、後援してくださった茨城県、茨城県教育委員会、日本美術院、東京藝術大学、茨城産業会議、協賛パートナーとなってくさいました株式会社アイト科学、株式会社アイテックジャパン、株式会社旭物産、株式会社五浦刊行ホテル、株式会社イトウ、茨城県信用組合、株式会社カスミ、木内酒造合資会社、香陵住販株式会社、株式会社光和印刷、株式会社幸和義肢研究所、コロナ電気株式会社、株式会社サザコーヒー、株式会社三友製作所、三和ニードルベアリング株式会社、株式会社常陽銀行、助川電気工業株式会社、鈴縫工業株式会社、関彰商事株式会社、ダイドードリンコ株式会社、株式会社筑波銀行、中川ヒューム管工業株式会社、株式会社中村自工深川製作所、日東電気株式会社、ネットトヨタ茨城株式会社、株式会社野上技研、株式会社坂東太郎、平沼産業株式会社、水戸信用金庫、（有）モーハウス（五十音順）のみなさま、さらにご協賛くださいました名古屋ポストン美術館、福井県観光営業部文化振興課、公益財団法人妙高文化振興事業団の皆さま、五浦日本美術院岡倉天心偉績顕彰会、江戸千家、岡倉天心福井県顕彰会、岡倉天心横浜顕彰会、いがた妙高岡倉天心顕彰会、福井県立美術館のみなさま、そして、シンポジウムを主催した茨城大学と五浦・天心地域振興プロジェクト実行委員会の関係者の皆さま方、どうもありがとうございました。

本書の編集に関しては、茨城大学社会連携センターの教職員の方々、五浦美術文化研究所の同

僚たちの協力を得た。ここに御礼を申し上げたい。そして、本書の刊行の意義を理解してください。魅力的な本に仕上げてくださった思文閣出版と編集者の井上理恵子さんに感謝の意を表したい。

なお、シンポジウムは、『平成二十八年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業』の援助を得たことをここに明記し、謝意を表することとする。

二〇一七年冬

五浦美術文化研究所長 藤原 貞朗

ま行

マクラウド、ジョセフィン Josephine MacLeod 1858-1949	47, 48, 49, 51, 57
マックリーン、ジョン・アーサー John Arthur MacLean 1879-1964	186, 187, 189, 196
正宗得三郎 1883-1962	82
町田久成 1838-1897	21
松尾敏男 1926-2016	15
松平春嶽 1828-1890	191
マティス、アンリ Henri Matisse 1869-1954	82, 84
ムーレ、ガブリエル Gabriel Mourey 1865-1943	199
モース、エドワード・シルヴェスター Edward Sylvester Morse 1838-1925	30, 33-35, 66

や行

山中商会	69, 70
横山大観 1868-1958	13, 15, 23, 61, 72-74, 76-79, 84, 112, 116, 184, 185
横山松三郎 1838-1884	20, 21
『義経物語 The Legend of Yoshitsune』(岡倉覚三)	188

ら行

ラ・ファージュ、ジョン John La Farge 1835-1910	74, 124, 192
ラマクリシュナ教団	47, 54
リンカーン、エイブラハム Abraham Lincoln 1809-1865	19, 20
レフラー、チャールズ・マーティン Charles Martin Loeffler 1861-1935	106, 108
六角紫水 1867-1950	73, 76-78, 194, 195

蜷川式胤 1835-1882	21, 35
『日本の目覚め The Awakening of Japan』(岡倉覚三)	86, 116
日本美術院	5, 13-16, 22-24, 64, 72, 82, 83, 141, 142, 181, 184, 194
野呂元義	59

は行

ハーヴェマイヤー、H・O Henry Osborne Havemeyer 1847-1907	32
長谷川路可 1897-1967	199
ハートリー、マースデン Marsden Hartley 1877-1943	75
バナネルジー、プリヤンバダ・デーヴィー Priyamvada Devi Banerjee 1871-1935	54, 56, 105, 194
ハルダー、アジット Asit Haldar 1890-1964	57
バルーチャ、ルストム Rustom Bharucha 1953-	122
万国博覧会(1876年、フィラデルフィア)	31
ビゲロー、ウィリアム・スタージズ William Sturgis Bigelow 1850-1926	30, 33-36, 39, 66-68, 70, 72
菱田春草 1874-1911	23, 63, 72, 73, 76-80, 116, 184
飛田周山 1877-1945	170, 184
《白狐》(岡倉覚三)	95, 105-112
平櫛田中 1872-1979	133, 175, 185
ファーマー、サラ・ジェイン Sarah Jane Farmer 1844-1916	64, 71, 72, 74, 77, 120
フェノロサ、アーネスト・フランシスコ Ernest Francisco Fenollosa 1853-1908	21, 22, 26, 30, 33-36, 38, 39, 66, 72
フェンウェイ・コート(ガードナー美術館、ボストン)	36, 64, 69, 73, 78, 80
フォシヨン、アンリ Henri Focillon 1881-1943	199, 200
ブッダ・ガヤー(地名、インド)	49, 50
ブル、サラ・チャップマン(オーレ・ブル夫人 Mrs.Ole Bull)Sara Chapman Bull 1850-1911	47, 48, 50, 51, 57, 170
ブレア、ドロシー Blair Dorothy	189, 197
文化財保存法(1950年)	25
ペリー、マシュー Matthew Calbraith Perry 1794-1858	19, 30
ベルル僧院(インド)	48, 49
ベンガル(地名、インド)	46, 54, 56, 57, 61
ホイットティア、ジョン・グリーンリーフ John Greenleaf Whittier 1807-1892	71
ボストン(地名、アメリカ合衆国)	5, 6, 9, 30, 31, 33, 35, 36, 38, 39, 42, 44, 48, 64, 65, 67, 68, 71-73, 77, 82-84, 93, 107, 108, 115, 124, 132, 133, 136, 170, 185, 186, 188, 189, 192, 193, 196
ボストン・オペラ・カンパニー(1908年創設)	108, 109
ボストン美術館	6, 13, 24, 26, 29-39, 41-43, 56, 70, 74, 85, 106, 109, 115, 125, 170, 182, 184, 186, 188-190, 194, 196, 197
ボーズ、ノンドラル Nandalal Bose 1882-1966	57
堀至徳 1876-1903	48

敵子陵 B.C.39-A.D.41	85, 182
『小敦盛琵琶歌』(岡倉覚三)	188
古器旧物保存方(1871年)	20, 24-25
国宝保存法(1929年)	25, 26
古社寺保存法(1897年)	22, 25
コルカタ(地名、インド)	47-49, 51, 55-57, 59, 61, 119

さ行

齋藤隆三 1875-1961	179
サウス・ケンジントン美術館(現・ヴィクトリア&アルバート美術館)	38, 40
サージェント、ジョン・シンガー John Singer Sargent 1856-1925	67, 68
サースビー、アイナ Ina Thursby 1855-1941?	72-76, 80
サースビー、エマ Emma Thursby 1845-1931	72-76, 80
サールナート(地名、インド)	50
シスター・ニヴェディータ Sister Nivedita(マーガレット・ノーブル Margaret Elizabeth Noble) 1867-1911	49, 51, 52, 54, 55, 57
下村観山 1873-1930	23, 184
ジャガンダート寺院(インド)	56
ジャポニスム Japonisme	31
シャンティニケタン(地名、インド)	61, 124
壬申検査(1872年)	20, 21
住吉広賢 1834-1883	34
千玄室(十五代) 1923-	177
センチュリー・クラブ(ニューヨーク)	73, 74, 79

た行

太公望(呂尚) B.C.11世紀頃	122
太陽神寺院(コナーラク、インド)	56
ダウ、アーサー・ウェズリー Arthur Wesley Dow 1857-1922	75
タゴール、アバニンドラナート Abanindranath Tagore 1871-1951	57
タゴール、スーレンドラナート Surendranath Tagore 1872-1940	51, 56
タゴール、ラビンドラナート Rabindranath Tagore 1861-1941	51, 55, 57, 59, 61, 62, 126, 202
『茶の本 The Book of Tea』(岡倉覚三、1906年)	5-7, 14, 18, 81, 82, 85, 87, 89-94, 95-99, 102, 104, 105, 108, 111, 125, 133, 169-171, 176-182, 186, 188, 194, 198, 200
陶淵明 365-427	84, 85, 182
『東洋の理想 The Ideals of the East』(岡倉覚三、1903年)	5, 40, 52, 86, 116, 198, 200
富田幸次郎 1872-1938	69, 186-188, 190, 196, 197

な行

新納忠之介 1869-1954	23, 24
新渡戸稲造 1862-1933	188

索引

* 主として本書で言及した人名、著作物名、教育・研究機関名、地名などを挙げた。ただし、岡倉覚三(天心)、五浦、六角堂など類出するものは省いた。

あ行

アジャンタ(地名、インド)	51
『安宅 Ataka』(岡倉覚三)	188
アッピア、クワメ・アンソニー Kwame Anthony Appiah 1954-	43
荒井寛方 1878-1945	61
板谷波山 1872-1963	24
五浦派	82
伊藤若冲 1716-1800	24
伊東忠太 1867-1954	21, 25
ヴァーラナシー(地名、インド)	49-50
ヴィヴェーカーナンダ、スワミー(スワミジ) Swami Vivekananda 1863-1902	45-51, 53-55, 58-60, 62
ヴェーダーンタ学派	53
エマーソン、ラルフ・ウォルド Ralph Waldo Emerson 1803-1882	31
大久保喬樹 1946-	83, 97
大谷光瑞 1876-1948	25
小倉源蔵	170, 174, 198
オリエンタリズム orientalism	52

か行

堅山南風 1887-1980	15
カーティス、フランシス・ガードナー Francis Gardner Curtis 1868-1915	41
ガードナー、イザベラ・スチュワート Isabella Stewart Gardner 1840-1924	63-74, 77-80
ガードナー美術館 Isabella Stewart Gardner Museum(フェンウェイコート)	67, 186
狩野永徳 1815-1891	34
狩野芳崖 1828-1888	191
ガンジー、マハトマ Mahatma Gandhi 1869-1948	57
木下長宏 1939-	96, 97, 182
九鬼隆一 1852-1931	21, 22, 178
熊田由美子	181
倉斗宗覚	177-179
グリーンエイカー(地名、アメリカ合衆国メイン州)	64, 71, 72, 74-76, 78-80, 116, 120, 121, 124

おかくらてんしん いづら せかい
岡倉天心 五浦から世界へ

——茨城大学国際岡倉天心シンポジウム2016

2018(平成30)年1月25日発行

編者 茨城大学社会連携センター・
五浦美術文化研究所

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-533-6860(代表)

装幀 上野 かおる

印刷
製本 亜細亜印刷株式会社
